

「世界再構築の夢」に突き動かされる人

山佐木進第六詩集『そして千年樹になれ』に寄せて

1

山佐木進さんの詩には、人びとが共に暮らしている街をそのままに散策し、本来的に人びとが了解し合おうとする、柔らかな精神性を驚嘆みにしてしまうところがある。日常的に見慣れた他者や事物でさえ、その存在に深く驚き、畏敬してしまふ純粋な精神性から詩が溢れ出てくる。その初源に立ち戻っていくまっさらな眼差しが、山佐木さんの詩の特長だと、私には感じられる。一九九六年に刊行された第二詩集『ラビリンスの雨』に五行の詩「咲く」がある。

咲く

つつじが咲いている

通勤電車の車輪の鉄粉を吸い込んで

つつじが咲いている

いのちがけで広がっている都市のおおぞら

詩人の生きる場所から切り離し、詩的言語だけを独立させようとする試みは、詩人たちが言葉の自傷行為を繰り返しているような悲壮感が漂っており、一般読者はあきれ果て敬遠してしまっているのだろう。そんな現代詩の袋小路の中で、山佐木さんの試みは、人びとの間に本来的に広がっていた言葉の伸びやかなコミュニケーション力に再び気付かせてくれる。山佐木進さんは、私の暮す千葉県柏市の隣の我孫子市に住んでいる。湖北台という地名は手賀沼の北の高台という地形を現しているのだろう。たぶん手賀沼を眼下に眺める場所を散策されているのかも知れない。周囲二十kmの手賀沼を取り巻くように柏市と我孫子市は存在している。山佐木さんとは、確か『鳴海英吉全詩集』出版記念会かその後の「鳴海英吉研究会」に参加してください、初めてお会いした。山佐木さんは鳴海英吉さんと同じ詩誌「光芒」の元同人で、鳴海さんを畏敬していて、全詩集の価値に誰よりも共感してくれた。そして全詩集を多くの人びと読んで欲しいと願って地元の幾つかの図書館にも寄贈してくれたのだ。そのような無償の行為をしてくれた詩人が山佐木さんであり、全詩集の編集委員の一人として、その行為に感激したことを今も忘れることはない。

2

第三詩集『風土記』の冒頭の詩「風土記」は、山佐木さんという詩人を語る場合には、欠かせない詩だろう。

この詩の最終行を読むと、私には山佐木さんが人びとの中に潜在する「都市のおおぞら」のような詩を直指しようと試みてきたことを感ずる。そのためにはまっさらな感性で、日常の中で硬直した精神を一度バラバラに解体させようとしている。このように山佐木さんの試みは、都市の中で人びとが生じてくる新鮮さを、いかに汲み上げてくるかが課題なのではないか。このような純粋な精神性を突き詰めている詩人を、私はとても貴重な存在だと考えている。

芸術的な言葉を模索しながら他者に詩を届けることが可能か、という問いを発して詩作することは、詩人のなすべき発語の原点だろう。けれども詩人の個人言語（パロール）を追究することに急ぐ、他者そのものへ語りかける姿勢を無くしてしまうモノローグ的な傾向が現代詩にはあり、そのことによつて読者離れを加速させたことは否定できない事実だろう。現代詩は一般的に理解されなくても構わないのだ、というキヤリアのある詩人たちの信じられない言説を私は何度も聞いたことがある。しかし私はそのような公的言語（ラング）を軽視して、個人言語の実験だけを過大評価して、詩人たちの狭い世界に詩を追い込んでいく考え方は、言語思想を根本的に履き違えているとしか思えない。ラングを豊かにするためであり、パロールはいつしかラングになるために様々な試みをするのであつて、ラングとパロールは相互に刺激し補充しあう表裏の一体であるべき言語行為であるだろう。また詩を

風土記

夜明けのかみなりが

東経一四〇度の手賀沼を

地ひびきたてて渡っていく

あやめの花は

いつとき青ざめてふるえ

やがてふつくらつややか恋の花になる

かみなりのはげしい足踏みに

古代の水が目をさます

手賀沼 印旛沼 霞ヶ浦が

ひとつの水域でつながっていたころの

香取の海の地下水が

目をさます

利根川は父

太平洋は母

ゆるやかに連なる丘陵のもろ腕に

幼子のように抱かれていたかわいらしい海よ

海はどこへ去っていったのか
散らばる貝塚の歯形を残して

あづまはや
ヤマトタケルの船底をかついで
新治まで流れついた波たちよ
海はどこへ帰っていったのか
麻賀多神社の大杉を枯らし
佐倉宗吾の直訴みちをつくつて
どこへ

いま
アルミニウムの大きな翼の鳥たちが
風土記の丘の死者たちの骨をゆさぶつて
飛んでいる

昼の月

この詩篇の魅力的なことは、千葉・茨城などの関東平野の深層に原故郷を見出そうとすることだ。そして手賀沼・印旛沼・霞ヶ浦が「香取の海」によってつながっていたことを生き生きと語っていて、想像力を刺激してくれる。山佐木さんによると、今も足許には幻の「香取の海」が広がっているのであり、そのことよって人びとがつながっていることを透視させてくれる。鳴海英吉さんは日蓮宗不受不施派の実証研究で下総台地をバイクに乗って駆け回っていた。山佐木さん

自分のかがやきで
発信しつづけるということだ

わたしの生は
他者のよろこびの中にこそあれ
それでいい

それだけでいい

一九四三年生れの山佐木さんは、会社勤めを定年退職されて、今は好きな詩作を続けているが、自らの存在を「十月の蟬」と擬している。世俗の価値観に縛られずに超越的であり、隠居者の吹っ切れた眼差しがある。俗世間を知り尽くした後にも、本当に大切な純粹さや素朴さを忘れることなく、生きることにも必要なエネルギーが何であるかを問いかけている。山佐木さんの詩は、その意味で誰よりも生きる希望を語っていると思われる。「生きるということはいま 発光しているということだ」という詩行などはその典型だ。「わたしの生は／他者のよろこびの中にこそあれ／それでいい／それだけでいい」。このような「他者のよろこび」を自己の喜びのよりに賛美できる精神は、とても清々しく、人として学ぶべき美德がたくさんある。「それだけでいい」という断言の仕方に、最も大切な無償の詩的精神が存在していると私には感じられる。

もまた、下総台地と常陸台地を合わせた常総台地に入り込んでいた、香取の海の痕跡を辿って歩いてきたのだろう。「海はどこへ帰っていったのか」という問いそのものが山佐木さんの詩的精神だと私には感じられる。自分を含めた人びとの心の深いところに「香取の海」の存在を甦らせようとしているのだろう。その意味で山佐木さんの詩は、現代詩の悲壯感漂う孤独感とは、無縁であり、古代から現代にいたる人びとの大らかな心の中に住み込んでいける可能性を感じさせてくれる。

二〇〇六年に発行した第四詩集『ひぐらし三重奏』も山佐木さんの純粹な詩的精神がいたるところに輝いている。例えば「かがやき」という詩がある。

かがやき

空澄んで十月の蟬のなごり啼き

座頭ころがし坂を行く

ころがる

ころがす

ころがされる

生きるということ

いま 発光しているということだ

3

新詩集『そして千年樹になれ』には、今まで読んだことのない詩集に触れた新鮮さを感じさせてもらった。I章の二十四篇の冒頭詩には「吉日」が置かれている。

吉日

ありつたけの光をふりまきながら

夜明けはやってくる

きのうの水平線で波うつ肩を

しずかに眠りにつかせ

きょうの地平を

やさしくほぐしてさすりながら

おはようございます

きみの目覚めの裏側が

夢のオブラートにつつまれる

こうして夜明けは毎朝

新しい始まりを届けにくる

忘れてしまうこと

やり直しもできること

通勤途中の大通りで

すれ違った車のナンバープレート
習志野こ11ー22 イイフウフ
柏い25ー25 ニコニコ
いい夫婦とにこにこの この出会いごと
とびつぎりの一日が
はじまりそうだ

特別なことではなく、今日は何かいことがありそうだと
いう予感を生きること「吉日」という言葉に込めている。
この聞きなれた言葉の手垢や埃を取り除いてまっさらにして、
山佐木さんは読むものに本来の意味をさりげなく届けてく
れる。朝とは「ありつたけの光」がふりまかれる瞬間なので
あり、生きているものにとつて祝福された時間の到来である
ことに気づくことから「吉日」がやってくるのだと語ってい
る。その意味では多くの他者に対して「吉日」を創造しよう
と山佐木さんは積極的に呼びかけているのだ。ある意味で山
佐木さんは現代詩を洗濯して、「都市のおおぞら」のもとに本
来的な詩として晒しているのかも知れない。I章にある「編」
という詩も私たちの願いを汲み上げてくれている。

編

地球の生きものの未来がどんなに困難な状況におかれようと、
それを切り抜けていくのは、山佐木さんの詩のような楽天的
な「世界再構築の夢」であると確信している。最後に詩集タ
イトルの「そして千年樹になれ」という言葉が出てくるIII章
の詩「めざめ」を引用し、この小論を終えたい。この世がつ
まらなく思える時や、詩を読むことの少ない人びとに、この
詩集を読んで欲しいと願っている。

めざめ

冬のおわりの日
ポケットに入れたままの ふたつの樹の実
相馬惣代八幡宮の 椎の実ひと粒
名戸ヶ谷法林寺の 銀杏ひと粒
ペランダの植木鉢に 植えてみた

五月 緑の芽が出はじめ
イチョウの葉の形になった
室町 江戸と生きぬいてきてなお
今 を生き続けている樹木のふたつの命を
思いがけなくわたしは
呼びさましてしまった

枯れ竹の枝のかたちが
チンパンジーの
だらしない腕のようにたれさがっていた朝
ぶつきらぼうなまわり道で
小さな渦のつむじ風が
つま先をすりぬけていった

空のあちこち ちぎれの雲は
世界再構築の夢ふくらませ
まざりつながら
どこに流れつこうとしていたのか

山佐木さんは散策しながら、何かを一つひとつ捨てていっ
て、純粹に風景を見詰めることを詩に変換するような言葉を
獲得したのだろう。言葉に変換する時に、見慣れた風景の奥
に世界があることを透視してしまう。その働きは想像力とい
うか、風景を動かし変形する力なのかもしれない。しかしそ
れは頭で創り上げたものではなく、風景そのものの動きの中
から自然発生したかのように汲み上げられるのだ。そして世
界中の人びとが文明の変わり目の中で苦悩しながら、「世界
再構築の夢」を形作ろうとしている事に深い共感を寄せてい
る。山佐木さんほど人間を含めた命そのものを信じ賛美して、
その未来を楽天的に物語る詩人はいないだろう。私は人間や

旅のはじめの馬だまり
消えた街道
つくりなおされる たどり道
いにしえびとの 願いごとや息づかい
そんな華やぎと衰えを
見つめてきたふたつの樹

めざめたぎんなん 何になる
めざめたしいの実 何になる

そんなたわいないことを口ずさみながら
そして千年樹になれ と
声かけてみる

この詩に出てくる名戸ヶ谷法林寺は柏にあり、買い物つ
いでに私も大銀杏を眺めたこともあった。この千年樹の下か
ら銀杏を拾い、「そして千年樹になれ」と呟きながら樹木を育
てている詩人がいるとは、詩人という存在もまだ捨てたもの
ではない。この詩をじっくり読めば、山佐木さんは全ての生
きているものに向かって、この言葉を贈り伝えようとしてい
るのだと私には感じられる。